

氏名(本籍)	あ い ざ わ ひ ろ み つ 相 澤 宏 充 (神奈川県)		
学位の種類	博 士 (心身障害学)		
学位記番号	博 甲 第 2233 号		
学位授与年月日	平成12年3月24日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	心身障害学研究科		
学位論文題目	聴覚障害児における単文の処理過程に関する実験的研究		
主査	筑波大学教授	教育学博士	吉野 公喜
副査	筑波大学教授	学術博士	斎藤 佐和
副査	筑波大学助教授		四日市 章
副査	筑波大学助教授	博士(心理学)	吉田 茂

論文の内容の要旨

1. 研究の目的

聴覚障害児は音声言語の入力が制限されていることから、音声言語の統語能力に遅れや偏りが存在することが、従来多く指摘されてきた。日常生活において文字による情報の重要度が増している現在、聴覚障害児の書記言語能力の向上のために、統語能力の獲得は重要課題といえる。そこで本研究では、単文という基礎的な言語刺激の処理過程における、統語情報やその他の情報の影響について詳細に検討し、聴覚障害児の単文の認知及び理解過程について実験的に明らかにすることを目的とする。

2. 実験の方法

単文の理解過程を検討した第1研究では、正しい文と、統語情報、意味情報を逸脱させた非文を刺激とし、文が正しいか、誤っているかを判断する文法性判断課題を行った。単語の認知過程における文脈の影響を検討した第2研究では、格助詞の正誤という統語情報を変化させた単文について、半数の述部動詞を非単語と置き換えて刺激とし、ターゲットの述部動詞が単語であるかどうかを判断する語彙判断課題を行った。

両研究ともに、刺激の単文をパソコンの画面に項、述部の順に呈示し、述部が呈示された時点で被験者に課題を遂行させた。被験者は、文の正誤または述部が単語、非単語であるかについて、できるだけ速く、正確に判断し、割り当てられたキーを押すことで反応することが求められた。それぞれの課題を遂行する反応時間を指標とし、その反応時間の増減が示す処理過程の変化と、呈示した文のもつ情報の関連について分析を行った。

第1研究では、聾学校高等部及び専攻科に在籍する生徒、及び小学部高学年児童を対象とし、第2研究では聾学校小学部高学年児童を対象とした。また、それぞれの研究で健聴の高等学校生徒、小学校児童を比較のための被験者とした。

3. 結果の概要

3. 1 単文の理解過程における言語処理

聴覚障害群は情報の種類によって、単文の理解過程における言語処理の特徴が異なっていた。特定の情報の処理については、全体的な反応時間自体は長いものの、健聴群と同様の処理の特徴を示したが、統語情報などの情

報が処理に影響を与えていない場合もみられた。従って、聴覚障害群は、情報の種類によって言語処理に対する影響し易さに差があり、言語処理に影響を与えやすい、より基礎的な情報に対する処理を確立していたと考えられる。

また、小学部段階の聴覚障害群では、格助詞の正誤という統語情報の影響を受けなかったが、高等部段階では、健聴群と同様、統語情報の影響を示す反応パターンを示した。このことから、聴覚障害群は、健聴群が小学部段階で獲得している単文の理解に関する言語処理を高等部までかかって獲得する可能性が示された。

3. 2 単語の認知過程における文脈の影響

聴覚障害群は、ほぼ一貫して、格助詞による統語的な文脈の影響を受け、単語を認知していた（統語的なプライミング効果）。これは、小学部段階で既に、統語情報に対し、健聴の成人と同様の特徴をもった言語処理を確立していることを示している。単語の認知過程において統語情報の影響がみられることから、先行研究で指摘されてきた、聴覚障害児の格助詞の使用の困難性は、単語の認知過程より上位の理解に至る高次の処理過程において生起していると想定される。

また、聴覚障害群は意味情報の処理に特徴をもっていた。項と述部が意味的に一致するかどうかという意味カテゴリの整合性の要因を操作し、文を正文から非文へと変化させた文脈を刺激として用いたにも関わらず、健聴群とは異なり、その影響を受けずに単語の認知を行っていた。

さらに、聴覚障害群は、他動詞や自動詞という動詞の種類に依存して、言語処理の特徴を変化させていた。他動詞の認知では、出現頻度情報に影響されない言語処理を行っていた。また、形態素の付加により自動詞と他動詞を変化させる動詞においても、格助詞による統語的なプライミング効果を消失させるという特異性を示した。従って、自動詞や他動詞に関して、心的な語彙項目の特性が健聴群と異なることが示された。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、聴覚障害児の単文の処理過程を反応時間を指標として、実験的に明らかにしようとしたものである。文法性判断課題（実験1～3）、語彙判断課題（実験4～10）とも、実験的枠組みはしっかりしており、結果及び考察も十分になされている。しかし、聴覚障害児の「統語」の問題は、聴覚障害児教育において、現在及び将来に亘って重要な課題であり、単文にとどまらず、複雑な文レベルの処理過程と関連づけて論じられねばならない。とはいえ、従来の聴覚障害児の言語発達研究をこえて、新しい知見が提出されており、学位論文として十分に評価できる。

よって、著者は博士（教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。